

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	教育学部
大項目	7 国際交流
中項目	
小項目	7.0.1 国際交流(国内外における教育研究交流)についての方針を明示しているか。
要素	(KG1) 国際化への対応と国際交流の推進に関する基本方針の適切性
小項目	7.0.2 国際交流(国内外における教育研究交流)を適切に行っているか。
要素	(KG1) 国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置の適切性 (KG2) 国内外の大学院間の組織的な教育研究交流の状況(院)

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 全学的な国際交流プログラムへの学生の参加を促す。	→「全学的な教育プログラムに基づいた国際教育・協力の基本方針の学部構成員への開示」「学生へのPR活動と個別相談の実施」	B	C	C	C	B
2. 教員の国際的な教育研究交流を促す。	→「学生へのガイダンスなどでの説明機会の頻度」	C	C	B	B	B
3. 国際理解に関する学部開講科目「多文化共生教育」「国際理解」などの履修を学生に奨励する。	→「教授会メンバーの国際的な教育研究交流の頻度」「多文化共生教育」「国際理解」の履修者数	B	B	B	C	B

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 教育学部での免許・資格の取得に必要な学校や保育所での実習の期間と、全学の国際交流のプログラムの期間が重ならないように配慮するなど、学生がしやすい状況を整えた。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2013年度の海外への派遣学生数は17名で、教育学部開設以来、増加の一途をたどっている。しかし、全学生の約1%に止まり、1学期以上の長期派遣や、国連ボランティアは1人もいなかった。まだまだ十分な量や質でないと思う。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 教員免許や保育士資格の取得を第一に考えつつ、全学の国際交流に参加することは、学生にとって大きな努力が必要となる。プログラムの内容を紹介する機会を作る、参加者に意見を聞くなど、参加者を増やすための方策を検討している。	☆
		その他	☆

目標2	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 教員の国際学会への参加・海外への調査研究については、授業等に大きな差支えのない限り認めるとともに、教育学部開設以降実施していなかった教員の学院留学を行うために、2013年度の時間割作成において、授業担当の分担などを考慮した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2013年度において、海外への教員派遣は7件で、前年度に比べて減少している。海外渡航への日程の都合上、授業を休講にしなければならないという問題点も指摘された。また、学院短期留学の制度によって、1名の教員が5ヶ月間イギリスに留学した。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 教員に国際学会への参加や、海外での研究や調査を奨励することについて学部長室会などでガイドラインを検討していく。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 大学の様々な活動の場面において、国際理解に関連する事業や企画を用意し、学生が出来るだけ国際感覚を持つことが出来るように、心がけた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2013年度の履修者数は、「国際理解」(1年秋)が104名、「国際協働論」(2年秋)が67名、「グローバル教育」が26名、「多文化共生教育」(3年秋)が37名であった。昨年と比べて増えている科目が多い。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 免許・資格の取得において必修でない科目であるので、学生に学ぶ意義をさらに理解させることが重要である。また、来年度からは、新カリキュラムに対応した科目が次第に増えていくので、それに対応した学生への履修の奨励が必要となる。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆
備考			☆

《評価指標データ》

(特定項目データ)本項目は数量的なデータによる評価(現状分析)が可能のため、次のとおり指標を定め経年比較している。

【教育学部】			単位	2009	2010	2011	2012	2013	2014	備考	
指標1	国際交流協定締結機関数		機関	—	—	—	—	—	—	5/1現在	
指標2	国際交流協定締結国数		国	—	—	—	—	—	—	5/1現在	
指標3	海外からの受け入れ学生数	国数	国	—	—	—	—	—	—	・5/1現在(学校基本調査) ・正規とは学位取得目的 ・累計数 ・交換は正規以外とする。 外国人留学生÷在籍学生数	
		外国人留学生	正規	人	1	2	2	2	3		3
			交換	人	—	—	—	—	—		—
		外国人留学生在籍学生比率	正規	%	0.3	0.3	0.2	0.1	0.2		0.2
			交換	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		0.0
その他(セミナー等による受け入れ)	人	—	—	—	—	—	—	—			
指標4	海外への派遣学生数	国数	国	—	—	—	—	—	—	累計数	
		人数	長期	人	0	0	0	1	0	0	・累計数 ・1学期以上を「長期」
			短期	人	2	5	8	10	17	17	・累計数 ・1学期未満を「短期」
		在籍学生比率	長期	%	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	海外へ派遣した学生数÷在籍学生数
短期	%		0.6	0.7	0.8	0.7	1.1	1.1			
指標5	海外からの受け入れ教員数	長期	人	0	0	0	0	0	0	・累計数 ・1年間以上を「長期」	
		短期	人	0	0	0	0	0	0	・累計数 ・1年間未満を「短期」	
指標6	海外への派遣教員数	長期	人	0	0	0	0	0	0	・累計数 ・1年間以上を「長期」	
		短期	人	6	16	13	9	7	7	・累計数 ・1年間未満を「短期」	
指標7	国連ボランティア(UNV)の参加者数		人	0	0	0	0	0	0	・累計数 ・春・秋の合計	
指標8	外国人教員比率		%	4.9	2.5	2.5	2.4	2.4	2.3	・5/1現在	

※指標3「海外からの学生の受け入れ」の「外国人留学生」(正規)は2009年度までは1年間の累計数。2010年度以降は当該年度5月1日現在の数字。(学校基本調査に合わせた。)

※指標7「国連ボランティア(UNV)の参加者数」は2013年度から国際社会貢献活動参加者を含む。また国連ボランティアは2013年度より国連ユースボランティアとなった。